

『今月の天候と農作業』

通巻第5628号
6月号
令和元年6月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の平均気温は平年並か高いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%、2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 6月8日(土)～6月14日(金)

前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 6月15日(土)～6月21日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 6月16日(土)～6月29日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稻

1 追肥と水管理

コシヒカリは倒伏しやすいため、幼穂長が1 cmの時期が適期です。施用量は収量や食味・品質に影響し、葉色を見て決めます。一発タイプの肥料を使用している場合、穂肥は必要ありません。

水管理は根の活力を維持するため、間断かん水を行います。ただし、穂ばらみ期から出穂開花期は、特に水を必要とする時期であるため、湛水します。16℃以下の低温で幼穂が障害を受けるため、気象情報に注意し、低温となる場合は深水にして幼穂を保温します。

2 病虫害対策

いもち病は、収量・品質を低下させる重要病害です。気温が上がり、曇雨天が続くと発生しやすい条件となります。穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本に、発生を確認した場合は、臨機防除を行います。

カメムシによる玄米検査等級の格下げが毎年多く発生しています。防除情報に注意し、防除を穂ぞろい期とその7～10日後の2回行います。地域で一斉に防除を行うと効果が高くなります。また、カメムシの繁殖場所である畦畔や周辺草地の草刈りを、出穂の2～3週間前までに一斉に実施することも有効な対策です。

◆普通期水稻

1 代かきと田植え

代かきでは、除草剤を効かせるため田面の均平に注意します。代かき時の浮遊ゴミには紋枯病等の菌核があるため、処分します。田植時は、いもち病やウンカ類の予防のために箱施薬を行います。補植用の苗は、いもち病対策として補植後処分します。

2 除草

除草剤はラベルの記載内容を確認し、水田でヒエの葉齢を見て適期に処理します。処理後7日間は掛け流しせず止水します。ジャンボ剤は拡散不足で薬害を生じることがあるため、ラベルに記載された水深で処理します。田植同時処理では薬害の対策として、田面の均平や移植深度、田植後の土の戻りに注意し、田植後は速やかに入水します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆収穫終了後の管理

ほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱消毒を行いましょう。

特に、きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

作物がウイルス病に感染すると回復は難しく、草勢の低下等により収量は大幅に低下します。これらのウイルスを媒介するのは、ハウス内に生息するウイルスを保毒した昆虫で、ハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ち出す前に、ハウスを閉めきり、蒸し込みを10日間程度行うなど、害虫を駆除した上で残渣を持ち出すようにします。特にウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施しましょう。

◆夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢低下や病害虫の発生が予想されます。次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ①通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。
- ②着果による負担を軽減するため、不良果を中心に摘果を行う。
- ③追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。
- ④摘葉や整枝・誘引を適切に行うことで過繁茂を防ぎ、通風や採光を良くする。
- ⑤風の通りを良くして、葉の濡れ時間を短くする。
- ⑥集中豪雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を十分に行う。

曇雨天が続いた後、急に晴れ間が出た場合などは、「葉やけ」や「しおれ」が発生しやすくなるため、日射が強い時に備えて、寒冷紗などで遮光できるよう準備しておきましょう。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆共通（排水対策）

梅雨入り前には、ほ場内外の排水路の整備・点検を行いましょう。ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路は排水口に確実につなげます。鍬を使って排水路を作る場合、ほ場内から排水口に向かって作業をすると傾斜を確保するためにどんどん深く掘り下げることになります。作業が大変になるため、排水口からほ場内に向かって土を上げていくことで、楽に傾斜をつけることができます。

◆かんしょ

トンネル栽培は収穫時期です。収穫は植え付け後100日目から可能となります。試し掘りを行い、芋の肥大を確認してから収穫を始めましょう。植え付け後130日以上経過すると、皮色や形状が悪化するため、適期収穫を心掛けましょう。

苗取りが終わった育苗床は、早めに片付けます。可能であれば、育苗床に残った種いもを持ち出し、堆肥舎で堆肥化させます。持ち出しが出来ない場合は、苗床ハウス内ですき込みます。しかし、土壌水分が不足している状態では分解の進行が遅くなるため、すき込み作業前に軽く散水し、土壌水分を確保した上で、すき込みを開始させましょう。

◆さといも

トンネル栽培は収穫期です。数株試し掘りを行い、重量を計り、10aの換算収量が1トンに達した上で収穫を始めましょう。収穫が終わった畑は、近隣の生育中のさといもへの疫病伝染を防ぐため、発病の有無に関わらず、速やかにロータリー耕耘で残さをすき込んでください。

畑付近の空き地に残さを放棄することは、絶対にしないでください。

生育中のさといもは、新しい葉の展開ごとに疫病予防の農薬散布を行います。

また、疫病の発生が見つけた場合、治療効果のある農薬の散布に切り換えます。発病極初期の散布が効果的であり、発生を見逃さないよう葉の濡れが残りやすい中～下位葉を注意して観察しましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

今年の極早生品種の着花量は平年並～やや多い傾向、早生や普通品種は、平年より少ない裏年傾向が見られました。生理落果後、結果数が多い樹では6月中旬から荒摘果を始めましょう。

極早生品種の火山灰土壌のマルチ栽培では、マルチ被覆の時期です。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保しましょう。

◆かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。薬剤散布から300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があった場合、次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らしましょう。

◆完熟きんかん

6月下旬の1番花の安定結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や、満開期のビニール被覆を実施し、十分な温度を確保しましょう。雨天が続く場合、昼間も28℃程度で加温しましょう。

◆マンゴー

梅雨に入ると、炭そ病や軸腐れ病の発生が多くなります。こまめな収穫や、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、曇雨天日の急な強い日射による日焼けが発生する場合があります。日焼け対策の遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定の作業に入りましょう。樹齢の進行により、収量や果実品質が低下している園では、改植を検討しましょう。

2 落葉果樹

◆くり

安定収量のためには施肥が非常に重要です。夏肥の施用は必ず行いましょう。特に樹勢低下対策、果実肥大促進、翌年の結果母枝の充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。年1回施肥のくり用緩効性肥料も開発されています。普及センターやJAに相談してください。

(鈴木 美里)

花 き

◆夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天時は、「葉焼け」の発生が多くなります。

事前対策としてカルシウム剤の葉面散布等を行い、当日は循環扇等の利用によるハウス内送風や寒冷紗等による遮光、葉水等の対策を実施してください。

「フローラル優香」の8月出荷作型については、正常な開花を促進するため、消灯後から2週間程度シェード（12時間日長）を実施してください。また、貫生花の発生を軽減するため、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。

「精の一世」の8月出荷作型は、6月10日前後が消灯日となります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れるため、夜間はシェードを開放するとともに、日中も十分に換気を行うことで、ハウス内の高温防止に努めましょう。

◆秋ギク

白さび病等の病害対策として、健全な穂を用いた親株育成や親株ほ場における予防防除の徹底等を行い、罹病株を本ほへ持ち込まないように留意しましょう。

なお、殺菌剤の選択については、地域の技術員に必ず相談してください。

◆デルフィニウム

11～12月出荷作型では育苗作業が始まります。

夜冷育苗については、早期抽だいを防止するため、本葉2枚展開時から16時間、10℃で行ってください。なお、セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は

生育不良や徒長の原因となるため、生育に合わせた細やかなかん水、施肥管理を実施してください。

◆ホオズキ

7月出荷作型では、着色促進のためのホルモン剤処理の時期となります。ホルモン剤は高温条件下で分解が早まるため、できるだけ涼しい早朝に散布してください。散布前後数日は寒冷紗等で遮光して、ハウス内温度を下げるように努めましょう。

また、着色ムラや薬害の原因となるため、ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布を避け、ホルモン剤散布の5日前までに必要な防除を行い、病害虫による被害を軽減しましょう。

◆シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染のリスクが最も高くなります。病害虫による被害は商品価値の低下につながるため、適期防除に努めましょう。

◆露地花木類

キイチゴやヒペリカムなど過湿ほ場で根腐れしやすい品目では、畝を立てたり周囲に明渠を設置したりするなど排水対策を行い、湿害の発生を防止しましょう。

また、多湿条件下では、べと病の発生が多くなるため、定期的に予防防除を行いましょう。発生が確認されたら治療効果の高い薬剤を早期に散布し、被害拡大の防止に努めましょう。

(藤原 明紀)

畜 産

◆家畜防疫対策

豚では、5月17日現在で、豚コレラが23例発生しています。また、中国等では、アフリカ豚コレラが発生しており、国内への侵入リスクが高まっています。

これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

◆家畜

雨が多くなり、気温、湿度ともに上昇し、家畜が暑熱ストレスを受ける時期になります。雨水が畜舎内に降り込まないようにし、風通しを良くするためにカーテンの開閉をこまめに行いましょう。畜舎周囲の水たまりは、蒸散時に畜舎内の湿度を急激に上昇させます。雨樋の設置等で水たまりができないように工夫しましょう。

子牛の下痢予防には、敷料を乾燥した状態にすることが重要です。敷料はこまめに交換しましょう。下痢を発症している子牛は隔離し、早めの治療を実施し、他の子牛に病気が蔓延しないようにしましょう。

乳用牛は、暑熱ストレスを受けやすく、乾物摂取量や乳量の低下など、生産性に影響します。体感温度を下げるため、換気扇や扇風機等で牛体に風をあてましょう。また、直射日光や輻射熱を抑えるために、寒冷紗等の設置や、屋根に石灰や断熱塗料の塗布等を実施し、牛舎内の温度を上げない工夫をしましょう。

この時期は、サイレージが腐敗しやすくなります。カビの発生等を確認した場合は、牛に給与しないようにしてください。

◆飼料作物

トウモロコシやソルガム等の生育期になります。長雨によるほ場の排水不良は、湿害等により飼料作物の生育を阻害するため、ほ場に水が溜まった場合は、速やかに排水対策を実施しましょう。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

1 二番茶の摘採

二番茶の摘採期は降雨が多いため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れのないよう適期摘採に努めます。

樹勢の強い茶園は、摘採前7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図ります。被覆により、黒葉腐病・葉擦れ・葉焼け等が発生しやすいため、生葉品質の低下に注意します。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の7日後頃に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。さらに、近年は梅雨入りが早まり、炭疽病も多発傾向です。地区防除基準に準じ速やかに予防防除を行います。

深刈り更新は、二番茶後梅雨明け時期を考慮しつつ早めに古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切り55～60日後に中切り面より3cm程高い位置で1回目の整枝をします。

施肥は、二番茶摘採前後に地区施肥基準に準じ、速効性肥料を施用します。

3 チャトゲコナジラミ対策

県内全域で、茶園でのチャトゲコナジラミ発生が確認されています。本害虫の成虫は、茶の新芽に群がる習性があるため、茶園では新芽をよく観察しましょう。なお、本害虫に対する問い合わせは、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へお願いします。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるため、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

1 収穫は、適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保を図りましょう。また、立枯病などの病害葉はクジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。

2 収穫葉にマルチ片や土砂などが付着している場合には除去しましょう。また、取ろし時にも異物が混入しないように心掛けて作業しましょう。

- 3 梅雨入りの時期ですが、ほ地の排水対策や環境整備に心懸け、耕種的病害防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には、使用基準を守り、野帳・使用実績票へ正確に記帳しましょう。
- 4 乾葉の取ろし時には、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょ。包を貯蔵する際には、たばこ以外の臭いを有する物を避け、虫害の被害を受けない様全包ビニール梱包を行いましょ。また、本年度より早期販売がありません。貯蔵期間が長くなるため梱包の際には水分に気をつけ、口を養生テープ等で閉じて貯蔵管理には十分注意しましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち 穂いもち	並 —	葉いもちの発生は穂いもちの発生につながります。今後、梅雨入りとともにいもち病が発生しやすくなるので、早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。 また、水田内および周辺のイネ科、タデ科などの雑草やイネ科飼料作物は、出穂開花前に早めに刈り取りましょう。
普通期水稻	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや少 やや少	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 媒介虫は次期作におけるウイルス病の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	ハダニ類	やや少	平年に比べ、発生面積率および寄生株率はやや少ない発生となっています。親株から苗に移行・増殖するので防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺数となっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメヤナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 並	黒点病は枯れ枝が感染源となるので除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	並 並 少	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカハラムシ	並 並 やや多 並 並 やや多 並 やや少 4 1 4 1	新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。			
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			